



ライフステージと支援の関係は？



A. その前に確認しておくことが3つあります。

相手の成長度合いや現在地を見立てる視点はいくつかあります。実際の年齢によるものや発達に即した年齢などがあって、それらのすべてを考えたうえで、どのような支援を提供していくか、を創っていくのですね。横軸にその人の実際の年齢、縦軸に発達の年齢、を置いてチャートを作ると解りやすいかもしれません。

そして特性や障がいを考え、支援を提供していくうえで重要になってくる3つの考え方があります。

- ・経験しなければわからない
- ・日々変化し続ける
- ・ライフステージはつながっている

これらのことは、本人や家族もそうなのですが、サポートする側もしっかりと認識できていないといけません。

経験しなければわからない、とはどういうことかということ、さまざまなことに挑戦し体験することによってつくられる「本人らしさ」に関わること。

“似合うと思って買ったシャツだけど、ぜんぜん着ていない” “食べてみたら案外おいしくて好きになってしまった” など、やってみなければ解らないことだらけですよね。

こういった経験は、障がいのあるなしに関わらずどんな人にも言えることなのです。

「これをしたい」と意思表示することも、やってみた経験が無ければ解りません。

さまざまなことに挑戦し体験して、たくさんの経験を積んだからこそ、経験値としてその体験の中から物事を取捨選択でき「本人らしさ」として出てくるのですね。

「挑戦して経験する」ということは、その人の主体性や意欲を育てることにつながっているのです。

日々変化する、ということも特性や障がいのあるなしにはかかわりません。

絵を描くのがうまい、歌がうまい、楽器やスポーツに秀でている、ユーモアのセンスがある、人生を楽しむ力を持っている、優しい、粘り強い、飽きっぽい、などなど、人はさまざまな力を持っていて、ハッとさせられることが多いもの。

誰もさまざまな側面があり、なにに才能を発揮して、なにが不得意かも人それぞれ違っているものですよね。

そして人は「挑戦し体験する」ことで変化していくものなので、いまの特性や障がいの状態のみを見てしまうと、その人となりを見誤ってしまいます。

特性や障がいは「その人の一部ではあるけれど総てではない」ので、特性や障がいの特徴だけを知識として仕入れたのでは、その人を理解したことにはなりません。

人の生活や状態は日々変化し続ける、ということと、それは特性や障がいのあるなしに関わることではない、ということを中心に留めて関わるが必要になってきます。

もうひとつの、ライフステージはつながっている、ということも大切なこと。

[教育](#)の場面では、保育所→小学校→中学校→高等学校→大学や就職、というライフステージですね。

福祉サービスの場面では、[児童発達支援](#)→[放課後等デイサービス](#)→成人が利用できるサービス、というライフステージになっています。

このどちらのライフステージも、環境が大きく変わり、分断されているように見えますが、その人の人生という視点から見ると、生き通し、なのです。

ひとつのつながっている流れの中で、その時々に関わっているサービスだけが違っているのだ、ということを知っていなければいけませんね。

ここを理解できずに適当に流してしまうと、[連携や協働](#)の大切さ、が見えなくなってしまいます。

これらのことを知識として知って自分の中で消化したうえで、特性や障がいに対する支援をしていくことを「[療育](#)」と言います。

できないことを補うだけではなく、特性や障がいのある人が「自分で決めたい」「やってみたい」と思える、意欲や主体性を育てることも目的としているのですね。

そのうえで、ライフステージという「[実際年齢に伴う人生における段階](#)」にも応じた支援をしていくところに、福祉サービスの役割があります。

今回は、[ライフステージに応じた関わりかた①](#)、についてです。

《MENU》

《[マズローの5段階は分類できる？](#)

[ライフステージに応じた関わりかた①？](#)》

2023-10-02 掲載